

青年期における自己愛傾向と自尊感情

新見直子・川口朋子・江村理奈・越中康治・目久田純一・前田健一

Narcissism and self-esteem in adolescence

Naoko Niimi, Tomoko Kawaguchi, Rina Emura, Koji Etchu, Junichi Mekuta, and Kenichi Maeda

本研究では、中学生、高校生、大学生を対象に自己愛傾向（評価過敏性、誇大性、身体賞賛、自己確信）と自尊感情（Rosenberg, Cheek & Buss, SE-Iの各自尊感情尺度で測定される自尊感情）を測定し、青年期の自己愛傾向と自尊感情の関連性について発達的に検討した。本研究の主な目的は、4つの自己愛傾向尺度得点と3つの自尊感情尺度得点が、中学、高校、大学の各学校段階においてどのような因子構造をもつのかについて二次因子分析をとおして検討することであった。自己愛傾向と自尊感情の7つの尺度得点について学校段階別に二次因子分析を行った結果、いずれの学校段階においても自己を受容する尺度得点から構成される因子と他者評価を気にする尺度得点から構成される因子の2因子が抽出された。

キーワード：自己愛傾向，自尊感情，青年期

問 題

自己愛に関する先行研究（例えば、中山・中谷, 2006; 小塩, 1998, 2001）では、青年期を自己愛傾向が高まる時期と捉えている。病理的な自己愛は、自己陶醉、過度の注目欲求と顕示性、誇大的空想、他者への関心のなさ等によって特徴づけられる（相澤, 2002; 小西・大川・橋本, 2006）。それに対して健常者にみられる自己愛傾向は、自分自身に関心が集中すること、自信や優越感等の自分自身に対する肯定的感覚、およびその肯定的感覚を維持することに対する強い欲求によって特徴づけられる（小塩, 1998）。青年期は学業成績や運動能力等について他者から評価を受ける機会が多いだけでなく身体的特徴が変化しやすい（例えば、第二性徴）ため、青年の自己評価は変動しやすいと考えられる。また青年期は、養育者から精神的に自立し、自分自身の特徴に基づいて自己構造を構築することが求められる時期でもある。このような青年期において自己愛傾向は、青年が自己を肯定的に評価し、その評価を維持し、自己構造を構築していく上で一定の役割を果たしていると考えられる（小塩, 1998; 相良, 2006）。

青年の自己構造の構築に自己愛傾向が一定の役割を果たすのであれば、青年期前期（中学生頃）から後期（大学生頃）にかけて自己愛傾向は増加すると推測される。その理由として次の2点が指摘できる。第1点目は、多くの大学生が職業選択という重要な課題に直面することである。この課

題を解決するためには、自分の能力、適性、興味等に関連する多様な自己の側面を評価し一定の自己構造を構築する必要がある。職業選択は自己に含まれる肯定的な側面に基づいて行われると考えられるので、職業選択を迫られた大学生はいくつかの自己の側面を肯定的に評価する必要がある。そのため、青年期後期で自己愛傾向が高まると考えられる。第2点目は、加齢に伴って友人や異性等との対人関係が拡大し青年が多様な評価にさらされることである。その結果、青年期後期では前期よりも自己評価が変動する可能性が高いので、自己評価を安定させるために自己愛傾向が増加すると考えられる。実際、青年の自己愛傾向を横断的に検討した先行研究（例えば、中山・中谷、2006；相良、2006）では、青年の発達に伴って自己愛傾向が増加することを明らかにしている。例えば相良（2006）は、中学生、高校生、大学生を対象にわが国の自己愛研究で頻繁に使用される NPI-S（Narcissistic Personality Inventory-Short version；小塩、1998）を実施し、年齢段階間の比較を行っている。中学生、高校生、大学生（20歳未満）、大学生（20歳以上）の4群間で比較したところ、NPI-Sの合計得点は大学生（20歳以上）が最も高く、高校生と大学生（20歳未満）が二番目に高く、中学生が最も低かった。下位尺度（優越感・有能感、注目・賞賛欲求）の群間比較でもほぼ同様の群間差が示された。

自己愛傾向と類似する概念として自尊感情がある。自尊感情は自分自身を基本的に価値あるものとする感覚である。自尊感情をもつことによって、人は積極的・意欲的に経験を積み重ね、満足感をもち、自己だけでなく他者も受容することができる（遠藤、1999）。自己愛傾向と自尊感情は自己を肯定的に評価するという点で共通しているため（小塩、2001）、この2つの概念には関連性があると考えられる。また、自尊感情の発達について検討した松岡（2006）は、大学生は高校生よりも自尊感情が高いことを実証している。この発達傾向は自己愛傾向の発達傾向と類似するので、発達傾向からも青年期における自己愛傾向と自尊感情は関連すると示唆される。

いくつかの研究（例えば、小西他、2006；小塩、1997、1998、2001）は、自己愛傾向と自尊感情の関連性を実証的に検討している。小塩（1997、1998）は、青年期後期に該当する大学生、短大生、専門学校生を対象に自己愛傾向と自尊感情の関連性を検討した。小塩（1997）では、自己愛傾向を NPI（Narcissistic Personality Inventory；Raskin & Hall, 1979；大石・福田・篠置訳、1987）、自尊感情を Rosenberg（1965；安藤訳、1987）の尺度と Cheek & Buss（1981；大淵訳、1991）の尺度を組み合わせて測定している。小塩（1998）では、自己愛傾向を NPI、自尊感情を SE-I（遠藤・安藤・冷川・井上、1974）で測定している。どちらの研究でも、NPIの合計得点は自尊感情と有意な正相関（順に、 $r = .38, r = .29$ ）を示した。しかし、NPIの下位尺度別にみると、相関パターンに違いがみられた。すなわち、どちらの研究でも NPIの優越感・有能感（順に、 $r = .50, r = .29$ ）と自己主張性（順に、 $r = .38, r = .52$ ）の2つの下位尺度は合計得点と同様に自尊感情と有意な正相関を示したが、NPIの注目・賞賛欲求（順に、 $r = .08, r = -.09$ ）は自尊感情と有意な相関を示さなかった。優越感・有能感とは他者よりも優れており有能であるという強い自己肯定感をもつ程度を、自己主張性は自分の意見を積極的に述べるなどの能動的・主体的に行動する程度を表す。それに対して、注目・賞賛欲求は他者に注目され賞賛されたいという他者からの肯定的評価を強く期待する程度を表す。小塩（1997、1998）の結果から、自己愛傾向と自尊感情の関連は、他者の評価にかかわらず自己を肯定的に評価

しその評価を維持しようとする自己愛傾向の肯定的側面と自尊感情の間でのみ示されることが明らかになった。

既述したように、わが国において自己愛傾向は、小塩（1998）の作成した NPI-S やその原版である NPI を日本語訳した尺度によって測定されてきた。しかし、NPI-S や NPI だけでは自己愛傾向を十分に捉えていないとして、最近、新たな自己愛傾向尺度が開発されるようになってきている。この背景として次の 2 点がある。第 1 点目は、NPI-S や NPI では他者の評価にかかわらず自己を強く肯定する誇大的・自己顕示的側面を強調しているが、他者に批判される事柄がないことを確認することで自己評価を維持する防衛的側面に注意を向けてこなかったことである（中山・中谷，2006）。中山・中谷（2006）は、この点を改善するため、防衛的側面に対応する評価過敏性と誇大的・自己顕示的側面に対応する誇大性の 2 下位尺度から構成される評価過敏性－誇大性自己愛尺度を開発している。新たな自己愛傾向尺度が開発される背景の 2 点目として、わが国の NPI や NPI-S では自己愛の重要側面である身体美への耽溺や自己を確信的に捉える側面等を十分測定していないことがあげられる（小西他，2006）。小西他（2006）は、アメリカで自己愛傾向を測定する際に頻繁に使用される Raskin & Terry（1988）の尺度を邦訳して NPI-35 を作成した。NPI-35 は 5 つの下位尺度（注目欲求，誇大感，主導性，身体賞賛，自己確信）から構成されている。NPI-35 の下位尺度と NPI-S の 3 つの下位尺度との相関係数を算出したところ、NPI-S の 3 下位尺度との相関係数は、注目欲求 ($r = .37 \sim .74$)，誇大感 ($r = .42 \sim .65$)，主導性 ($r = .53 \sim .60$) で高く、身体賞賛 ($r = .11 \sim .44$) や自己確信 ($r = .15 \sim .51$) で低い傾向にあった。この結果から、身体賞賛と自己確信の 2 つの下位尺度は NPI-35 独自の側面を捉えていると考えられる（小西他，2006）。

NPI-S の優越感・有能感と自己主張性の 2 つの下位尺度は、自己を強く肯定する誇大的・自己顕示的側面を捉えるものと解釈できるので、評価過敏性－誇大性自己愛尺度の誇大性と対応すると考えられる。また、NPI-S の注目・賞賛欲求の内容は、自己愛傾向の防衛的側面をある程度捉えていると考えられるので、評価過敏性－誇大性自己愛尺度の評価過敏性と対応すると考えられる。そこで本研究では、自己愛傾向の誇大的・自己顕示的側面と防衛的側面を測定するために中山・中谷（2006）の作成した評価過敏性－誇大性自己愛尺度を使用することにした。さらに、NPI-S や NPI で捉えられていない自己愛傾向を測定するために、NPI-35 の身体賞賛と自己確信の 2 つの下位尺度も合わせて使用することにした。したがって、本研究では、自己愛傾向を誇大性、評価過敏性、身体賞賛、自己確信の 4 側面から捉える。なお、中学生では対象者の負担を考慮して NPI-S を実施しなかったが、高校生と大学生対象の調査では NPI-S を追加して実施し、NPI-S と評価過敏性－誇大性自己愛尺度や NPI-35 の身体賞賛と自己確信との相関関係を確認することにした。

ところで、先行研究（小塩，1997，1998）では自尊感情を 3 つ尺度で測定していた。先行研究では、自尊感情の尺度の違いに関係なく同じ結果が得られているが、先行研究で使用されている Rosenberg の自尊感情尺度日本語版、Check & Buss の自尊感情尺度日本語版、遠藤他（1974）の SE-I を同時に使用した場合でも、同じ結果が得られるのか否かについて確認する必要がある。そこで本研究では、自己愛傾向を 4 つの側面から測定すると同時に、自尊感情を 3 種類の尺度で捉えることにした。

自己愛傾向と自尊感情の関連を検討した先行研究（小塩，1997，1998）に基づくと、多様な自己愛

傾向の側面のうち、他者評価にかかわらず自己を肯定的に評価しようとする側面（例えば、優越感・有能感や自己主張性）は青年の自尊感情と正の関連を示すが、防衛的側面（例えば、注目・賞賛欲求）は自尊感情と明確な関連を示さないと示唆される。しかし、各下位尺度間の単相関を検討するだけでは自己愛傾向と自尊感情の関連性について明確な結論を出すことが難しいと考え、本研究では4つの自己愛傾向の下位尺度得点と3つの自尊感情尺度得点を一括して二次因子分析を行うことにした。本研究の主な目的は、二次因子分析をとおして3つの自己愛傾向（誇大性、身体賞賛、自己確信）と3つの自尊感情が1つの因子を構成し、評価過敏性が別の因子を構成するか否かを検討することである。二次因子分析による検討によって、自己愛傾向と自尊感情の関連性がより明確になると考えられる。また、先行研究（小塩, 1997, 1998）では青年期後期のデータのみに基づいて自己愛傾向と自尊感情の関連性を検討していたが、本研究では中学生や高校生でも同様の関連性がみられるのか否かについても二次因子分析を使用して検討する。

方 法

対象者 中学生 530 名（男子 248 名、女子 281 名、不明 1 名）、高校生 134 名（男子 60 名、女子 74 名）、大学生 196 名（男子 30 名、女子 166 名）を対象者とした。

調査時期 2007 年 10 月と 11 月に調査を実施した。

調査内容 自己愛傾向の測定尺度として以下の 3 つの尺度を使用した。

1. **評価過敏性・誇大性**：中山・中谷（2006）の評価過敏性－誇大性自己愛尺度 18 項目を使用した。この尺度は評価過敏性（8 項目）と誇大性（10 項目）の 2 つの下位尺度から構成されている。なお、中学生の回答可能性を考慮して、項目 11「私には、持って生れたすばらしい才能がある」と項目 12「自分の体を人に自慢したい」の 2 項目は中学生の調査では削除した。

2. **身体賞賛・自己確信**：小西他（2006）の NPI-35 の中から、身体賞賛（3 項目）と自己確信（5 項目）の 2 つの下位尺度 8 項目を使用した。

3. **NPI-S**：小塩（1998）の NPI-S を使用した。この尺度は優越感・有能感（10 項目）、注目・賞賛欲求（10 項目）、自己主張性（10 項目）の 3 つの下位尺度 30 項目から構成されている。

自尊感情の測定尺度として以下の 3 つの尺度を使用した。

4. **Rosenberg の自尊感情**：Rosenberg（1965；安藤訳, 1987）の自尊感情スケールの日本語版 10 項目を使用した。

5. **Cheek & Buss の自尊感情**：Cheek & Buss（1981；大淵訳, 1991）の自尊感情尺度の日本語版 6 項目を使用した。中学生の回答可能性を考慮して、項目 3「私の人生は、すべてうまくいっていない（逆転項目）」と項目 4「おおいに自信がある」の 2 項目は中学生の調査では削除した。

6. **SE-I**：遠藤他（1974）の SE-I の 23 項目を使用した。小塩（1998）の因子分析では因子負荷量の低かった 3 項目が除外され、評価過敏（9 項目）、自意識過剰（5 項目）、自己価値（3 項目）、劣等感（3 項目）の 4 因子が抽出されていた。SE-I の各項目は疑問文であったが、本研究では他の尺度と組み合わせるため、他の尺度と同じ平叙文になるよう表現を修正して使用した。例えば、「他の人があなたと一緒にいることを好んでいるかどうかについて、あなたは気にしますか」

は「他の人が自分と一緒にいることを好んでいるかどうか気にする」に修正した。また、中学生の回答可能性を考慮して、項目 1「自分が知っている大部分の人に比べて自分のほうが劣っていると感じることもある」、項目 2「自分が価値ある人間だと感じている」、項目 18「初対面の人に会ったとき、時間つぶしに話をするのがむずかしい」、項目 21「自分の意見に同意しない人を説得している場合、自分が相手にどのような印象を与えているか気になる」の 4 項目は中学生の調査では削除した。

手続きと回答方法 中学生、高校生、大学生を対象に評価過敏性・誇大性、身体賞賛・自己確信および 3 つの自尊感情尺度を実施した。高校生と大学生には、これらに加えて NPI-S を実施した。回答方法は、いずれの尺度でも各項目の内容が自分にあてはまると思う程度について 5 段階評定(全くあてはまらないの 1 点～とてもよくあてはまるの 5 点)を求めた。各学校段階別に質問紙を作成し、各学校・大学または進学塾の講義・授業時間の一部を利用して集団実施した。

結 果

因子分析 逆転項目の得点を変換した後以下の 6 つの尺度別、学校段階別に因子分析を行った。

表 1 評価過敏性・誇大性の因子分析結果 (中学生)

項目	F1	F2	h^2
F1 評価過敏性			
3 人といると、馬鹿にされたり軽く扱われはしないかと不安になる	.71	-.02	.51
13 他人から間違いや欠点を指摘されると、憂うつな気分が続く	.69	.12	.49
10 他人から間違いや欠点を指摘されると、自分の全てが否定されたように感じる	.69	.14	.49
16 自分の欠点や失敗を少しでも悪く言われると、ひどく動揺(どうよう)する	.66	.07	.44
2 他人が私の発言や行動に注目してくれないと、自分が価値のない人間になったような気がする	.61	.08	.38
7 周りの人に自分が変な人に思われているのではないかと不安になる	.60	-.07	.37
4 人に軽く扱われて、あとですごく腹が立つことがある	.59	.03	.35
17 常にすぐれた人や目上の人に認めてもらえなければ、自信が持てない	.57	.20	.37
F2 誇大性			
9 私は、周りの人からもっと高く評価されてもよい人間だと思う	.09	.75	.58
14 自分自身では、要領もいいし、うまく判断のできるような賢さも備えていると思う	.03	.73	.53
15 自分はきっと将来成功するのではないかと思う	-.03	.69	.47
8 私は他に並ぶ人がいないくらい、特別な存在である	.05	.64	.41
18 自分の考えや感情の豊さ、感受性にはかなり自信がある	.07	.63	.40
1 自分にはどこか、他の人をひきつけるところがあるようだ	-.05	.56	.32
5 私の意見どおりにすれば、もっとものごとがうまく進むのに、と思う	.28	.49	.32
6 私は今まで他の人にはできないような経験をつんできた	.22	.45	.25
	寄与率 (%)		
	25.36	16.33	41.17

注1) 評価過敏性の α 係数は、中学生で $\alpha=.85$ 、高校生で $\alpha=.78$ 、大学生で $\alpha=.82$ であった。

注2) 誇大性の α 係数は、中学生で $\alpha=.83$ 、高校生で $\alpha=.85$ 、大学生で $\alpha=.83$ であった。

1. **評価過敏性・誇大性**：18項目（中学生では16項目）について先行研究と同じ2因子を仮定した因子分析（重み付けのない最小二乗法，Varimax 回転）を行った。高校生と大学生のデータについても中学生と同じ16項目について因子分析を行ったが、各学校段階の因子構造に違いがみられなかった。そこで、中学生対象に実施した16項目に基づいて以後の分析を行うことにした。因子分析の結果、中学生、高校生、大学生のいずれにおいても同じ因子構造が得られ、当該因子に対する負荷量は.38以上であった。代表例として中学生の因子分析結果を表1に示す。第1因子は中山・中谷（2006）の評価過敏性因子を構成する8項目から、第2因子は中山・中谷（2006）の誇大性因子を構成する8項目から構成されていたので、第1因子を評価過敏性、第2因子を誇大性と命名した。

2. **身体賞賛・自己確信**：8項目について2因子を仮定した因子分析（重み付けのない最小二乗法，Promax 回転）を行った。その結果、項目4「自分の体を見るのが好きである」の負荷量が高校生と大学生において低かった。そこで、いずれの学校段階でも同じ項目に基づく因子分析を行うために、項目4をすべての学校段階において除外し、残り7項目について再度因子分析を行った。その結果、中学生、高校生、大学生のいずれにおいても同じ因子構造が得られ、当該因子に対する負荷量は.32以上であった。代表例として中学生の因子分析結果を表2に示す。第1因子は、小西他（2006）の自己確信因子を構成する5項目から構成されていたので自己確信と命名した。第2因子は、小西他（2006）の身体賞賛因子を構成する2項目から構成されていたので身体賞賛と命名した。

表2 身体賞賛・自己確信の因子分析結果（中学生）

項目	F1	F2
F1 自己確信		
6 物事をやり遂げるのにめったに人には頼らない	.61	-.01
5 私はいつも自分の行動を理解している	.58	-.00
1 いつも自分のやり方で、なんでもうまく切り抜けられる	.54	.14
3 決断には責任を持ちたいと思う	.44	-.19
8 どんなことでもみんなを信用させることができる	.37	.27
F2 身体賞賛		
7 鏡で自分自身を見るのが好きである	-.16	.75
2 自分の体を自慢したいと思う	.01	.61
寄与率(%)	26.74	7.49
因子間相関	F1	.56

注1) 自己確信の α 係数は、中学生で $\alpha=.66$ 、高校生で $\alpha=.68$ 、大学生で $\alpha=.60$ であった。

注2) 身体賞賛の α 係数は、中学生で $\alpha=.58$ 、高校生で $\alpha=.50$ 、大学生で $\alpha=.47$ であった。

3. **NPI-S**：30項目について高校生と大学生のデータに基づいて先行研究と同じ3因子を仮定して因子分析（主因子法，Promax 回転）を行った。その結果、項目14「私は、多くの人から尊敬される人間になりたい」、項目17「私は、人を従わせられるような偉い人間になりたい」、項目20「機会があれば、私は人目につくことを進んでやってみたい」、項目21「いつも私は話しているうちに、話の中心になってしまう」、項目26「私は、人々の話題になるような人間になりたい」の5項目の

因子負荷量が低かった。そこで、これら 5 項目を削除し、残り 25 項目について再度因子分析を行った。その結果、高校生、大学生のいずれにおいても同じ因子構造が得られ、当該因子に対する負荷量は.39 以上であった。代表例として高校生の因子分析結果を表 3 に示す。第 1 因子は、小塩 (1998) の優越感・有能感因子を構成する 10 項目から構成されていたので優越感・有能感と命名した。第 2 因子は、小塩 (1998) の自己主張性因子を構成する 9 項目から構成されていたので自己主張性と命

表 3 NPI-S の因子分析結果 (高校生)

項目	F1	F2	F3	
F1 優越感・有能感				
4 私は、周りの人達より、優れた才能をもっていると思う	.85	-.11	.15	
1 私は才能に恵まれた人間であると思う	.84	-.13	-.01	
7 私は、他人より有能な人間であると思う	.76	-.02	.11	
16 私は、周りの人に影響を与えることができるような才能をもっていると思う	.75	.06	-.01	
10 私は、周りの人が学ぶだけの値打ちのある長所を持っている	.72	.10	-.09	
13 周りの人々は、私の才能を認めてくれる	.70	.15	-.21	
25 私は、どんなことでもうまくこなせる人間だと思う	.68	.05	-.01	
19 私が言えば、どんなことでもみんな信用してくれる	.63	-.05	-.04	
28 周りの人たちが自分のことを良い人間だと言ってくれるので、自分でもそうなんだと思う	.51	.03	.18	
22 私に接する人はみんな、私という人間を気に入ってくれるようだ	.48	.05	.09	
F2 自己主張性				
24 私は、自己主張が強いほうだと思う	-.29	.94	.16	
9 私は、どんなときでも、周りを気にせず自分の好きなように振舞っている	.06	.65	-.43	
3 私は、自分の意見をはっきり言う人間だと思う	-.08	.65	.17	
30 私は、個性の強い人間だと思う	.03	.64	-.01	
27 私は、自分独自のやり方を通すほうだ	.11	.59	-.12	
15 私は、どんなことにも挑戦していくほうだと思う	.21	.50	-.06	
6 私は、控えめな人間とは正反対の人間だと思う	.04	.49	.22	
12 私は、自分で責任を持って決断するのが好きだ	.33	.45	-.05	
18 これまで私は自分の思う通りに生きてきたし、今後もそうしたいと思う	.08	.39	-.07	
F3 注目・賞賛欲求				
5 私は、みんなからほめられたいと思っている	-.05	-.07	.84	
23 私は、みんなの人気者になりたいと思っている	-.05	.07	.76	
8 私は、どちらかといえば注目される人間になりたい	.19	.12	.68	
11 周りの人々が私のことを良く思っていないと、落ち着かない気分になる	-.11	-.16	.65	
2 私にはみんなの注目を集めてみたいという気持ちがある	.20	.16	.62	
29 人が私に注意を向けてくれないと、落ち着かない気分になる	.11	-.05	.60	
	寄与率(%)	33.98	9.15	6.50

注1) 優越感・有能感の α 係数は、高校生で $\alpha=.91$ 、大学生で $\alpha=.88$ であった。

注2) 自己主張性の α 係数は、高校生で $\alpha=.84$ 、大学生で $\alpha=.80$ であった。

注3) 注目・賞賛欲求の α 係数は、高校生で $\alpha=.86$ 、大学生で $\alpha=.86$ であった。

名した。第3因子は、小塩（1998）の注目・賞賛欲求因子を構成する6項目から構成されていたので注目・賞賛欲求と命名した。

4. Rosenbergの自尊感情尺度：10項目について先行研究と同じ1因子を仮定した因子分析（主因子法）を行った。その結果、いずれの学校段階でも因子負荷量の低かった項目8「自分をもっと尊敬できたらと思う」を除外し、残りの9項目について再度因子分析を行った。その結果、中学生、高校生、大学生のいずれにおいても.34以上の因子負荷量が得られた。代表例として中学生の因子分析結果を表4に示す。

表4 Rosenbergの自尊感情尺度の因子分析結果（中学生）

項目	F1
10 自分はだめな人間だと思うことが時々ある *	.65
7 自分に大体満足している	.62
3 自分を失敗者だと感じるが多い *	.62
9 自分が役立たずな人間だと感じるが時々ある *	.61
2 自分にはたくさんの長所があると思う	.61
5 私には自慢できるようなものはほとんどない *	.58
6 自分を好ましい人間だと思っている	.54
1 私は、少なくとも他の人と同じ程度には価値のある人間だと思う	.48
4 何をしてもたいていの人と同じ程度にはうまくできる	.45
	寄与率(%) 32 .98

注1) α 係数は、中学生で $\alpha=.81$ 、高校生で $\alpha=.81$ 、大学生で $\alpha=.84$ であった。

注2) *は逆転項目を表す。

5. Cheek & Bussの自尊感情尺度：6項目（中学生では4項目）について先行研究と同じ1因子を仮定した因子分析（主因子法）を行った。高校生と大学生のデータについても中学生と同じ4項目に基づいて因子分析を行ったが、各学校段階の因子構造に違いがみられなかった。そこで、4項目に基づいて以後の分析を行うことにした。因子分析の結果、中学生、高校生、大学生のいずれにおいても.41以上の因子負荷量が得られた。代表例として中学生の因子分析結果を表5に示す。

表5 Cheek & Bussの自尊感情尺度の因子分析結果（中学生）

項目	F1
10 私の人生は失敗である *	.82
2 私はだめな人間だと思う *	.66
4 別の人間に生まれ変わったらよいのにと、よく思う *	.57
12 自分の価値を信じている	.41
	寄与率(%) 39 .95

注1) α 係数は、中学生で $\alpha=.70$ 、高校生で $\alpha=.73$ 、大学生で $\alpha=.77$ であった。

注2) *は逆転項目を表す。

6. SE-I : 23 項目 (中学生では 19 項目) について先行研究と同じ 4 因子を仮定した因子分析 (主因子法, Promax 回転) を行ったが, いずれの学校段階においても固有値の推移から 1 因子解が妥当であると判断されたので 1 因子を仮定して因子分析 (主因子法) を行うことにした。高校生と大学生のデータについても中学生と同じ 19 項目に基づいて因子分析を行ったが, 各学校段階の因子構造に違いがみられなかった。そこで, 中学生対象に実施した 19 項目に基づいて以後の分析を行うことにした。因子分析の結果, いずれの学校段階でも項目 3「自分の知っている人々が, いつか自分を尊敬する日がくると確信している」, 項目 4「自分の過誤 (ミス) は自分のせいだと感じることもある (逆転項目)」, 項目 7「一般に, 自分のいろいろの能力について自信を持っている」の 3 項目の因子負荷量が低かったため, 残り 16 項目について再度因子分析を行った。その結果, 中学生, 高校生, 大学生のいずれにおいても.30 以上の因子負荷量が得られた。代表例として中学生の因子分析結果を表 6 に示す。

表 6 SE-I の因子分析結果 (中学生)

項目	F1
19 他の人が自分と一緒にいることを好んでいるかどうか気にする *	.75
22 友達や知り合いの中に自分のことをよく思っていない人がいるかもしれないと考えるとき, そのことを気にする *	.75
23 他の人が自分のことをどのように考えているか気になる *	.74
17 とんでもないミスやばかにされるような大失敗をしてかしたとき, そのことを気にする *	.70
12 人前を気にしたり, はにかみをおぼえることがある *	.64
11 他の人々がすでに集まって話し合っている部屋に自分1人で入っていくような場合, 気兼ねや不安を覚える *	.63
6 自己嫌悪をおぼえること(自分で自分がいやになること)がある *	.63
9 自分が他の人々とどのくらいやっつけていけるかどうかについて気にする *	.63
13 クラスや自分と同年輩の人々のグループの前でしゃべらなければならないとき, 心配したり, 不安に思ったりする *	.61
20 恥ずかしくてどうにもならないと思うことがある *	.57
10 自分の仕事ぶりや成績を審査する立場にある人の批評を気にする *	.55
5 自分について落胆(がっかり)するあまり, 何が一体価値あるものだろうと疑うことがある *	.54
15 他の人から自分が優等生とみられているか, あるいは劣等生とみられているかということについて, 気になる *	.51
16 人と一緒にいるとき, どんなことを話題にしたらよいか困る *	.48
8 自分にはうまくやれることなど全然ないといった気持ちになることがある *	.48
14 他の人々がみているところで, ゲームやスポーツをやっていて, それに勝ちたいと思っている場合, 取り乱したりまごついたり(あがったり)する *	.40
	寄与率(%) 37 .14

注1) α 係数は, 中学生で $\alpha=.90$, 高校生で $\alpha=.90$, 大学生で $\alpha=.89$ であった。

注2) *は逆転項目を表す。

得点化の方法 以上の因子分析の結果から得られた各因子別に1項目あたりの平均得点を算出し、それを各尺度得点とした。したがって、すべての尺度得点の得点範囲は1点から5点であり、得点が高いほど各尺度得点の傾向が強いことを表す。

自己愛傾向下位尺度得点間の相関 高校生と大学生のデータに基づいて、NPI-Sの3つの下位尺度と評価過敏性、誇大性、身体賞賛、自己確信との相関係数を算出した(表7)。仮定したとおり、評価過敏性は、NPI-Sの注目・賞賛欲求とのみ有意な正相関を示した。誇大性はNPI-Sの優越感・有能感と自己主張性だけでなく、注目・賞賛欲求とも有意な正相関を示した。身体賞賛と自己確信は、NPI-Sの3つの下位尺度とすべて有意な正相関を示した。大学生の相関係数をみると、大学生を対象に同様の相関分析を行った小西他(2006)とほぼ同じ結果であった。

表7 自己愛傾向下位尺度得点間の相関係数

	優越感・有能感		注目・賞賛欲求		自己主張性	
	高校生	大学生	高校生	大学生	高校生	大学生
評価過敏性	.00	-.01	.43 **	.55 **	.01	-.11
誇大性	.83 **	.75 **	.51 **	.34 **	.55 **	.45 **
身体賞賛	.59 **	.51 **	.41 **	.39 **	.35 **	.20 **
自己確信	.64 **	.55 **	.31 **	.15 *	.56 **	.39 **

* $p < .05$, ** $p < .01$ 。

下位尺度得点の学校段階間比較 表8は、中学生、高校生、大学生に共通する4つの自己愛傾向下位尺度得点と3つの自尊感情尺度得点のそれぞれについて平均得点と標準偏差(SD)を示したものである。各尺度得点別に3つの学校段階を独立変数とする1要因分散分析を行った。その結果、評価過敏性($F(2, 857) = 12.00, p < .001$)とSE-I($F(2, 857) = 15.12, p < .001$)で学校段階間に有意差が認められた。多重比較(Bonferroni法)の結果、評価過敏性は高校生や大学生が中学生よりも有意に高かった。逆に、SE-Iは中学生が高校生や大学生よりも有意に高かった。

表8 各尺度得点の平均得点と標準偏差(SD)

		中学生		高校生		大学生	
		M	SD	M	SD	M	SD
自己愛傾向	評価過敏性	2.66	0.83	2.99	0.73	2.89	0.80
	誇大性	2.32	0.74	2.50	0.74	2.37	0.72
	身体賞賛	1.67	0.78	1.80	0.77	1.80	0.75
	自己確信	2.73	0.69	2.68	0.66	2.71	0.59
自尊感情	Rosenberg	2.79	0.73	2.82	0.65	2.83	0.68
	Cheek & Buss	3.06	0.90	3.08	0.85	3.14	0.86
	SE-I	2.80	0.76	2.59	0.70	2.49	0.65

表 9 中学生の二次因子分析結果

	F1	F2
F1		
誇大性(愛)	.90	-.25
Rosenberg(尊)	.65	.45
自己確信(愛)	.64	-.11
身体賞賛(愛)	.56	-.09
F2		
評価過敏性(愛)	.31	-.84
SE-I(尊)	-.09	.80
Cheek & Buss(尊)	.45	.50
寄与率(%)	37.11	20.51
因子間相関	F1	.34

(愛)は自己愛傾向の下位尺度であることを表す。

(尊)は自尊感情尺度であることを表す。

表 10 高校生の二次因子分析結果

	F1	F2
F1		
誇大性(愛)	.88	-.21
Rosenberg(尊)	.85	.18
身体賞賛(愛)	.66	-.14
自己確信(愛)	.64	-.04
Cheek & Buss(尊)	.62	.26
F2		
SE-I(尊)	.04	.81
評価過敏性(愛)	.14	-.79
寄与率(%)	41.00	18.38
因子間相関	F1	.26

(愛)は自己愛傾向の下位尺度であることを表す。

(尊)は自尊感情尺度であることを表す。

表 11 大学生の二次因子分析結果

	F1	F2
F1		
Rosenberg(尊)	.83	.29
誇大性(愛)	.74	-.15
身体賞賛(愛)	.68	-.32
Cheek & Buss(尊)	.58	.33
自己確信(愛)	.56	-.04
F2		
評価過敏性(愛)	.26	-.92
SE-I(尊)	.08	.75
寄与率(%)	37.45	21.20
因子間相関	F1	.27

(愛)は自己愛傾向の下位尺度であることを表す。

(尊)は自尊感情尺度であることを表す。

二次因子分析 4つの自己愛傾向下位尺度得点と3つの自尊感情尺度得点に基づいて、学校段階別に二次因子分析（重み付けのない最小二乗法、Promax 回転）を行った。その結果、いずれの学校段階においても2因子が得られた（表9, 10, 11 参照）。因子構造をみると、すべての学校段階で第1因子には自己愛傾向の下位尺度である誇大性、自己確信、身体賞賛と Rosenberg の自尊感情が、第2因子には自己愛傾向の評価過敏性と SE-I が、それぞれ高い負荷量を示した。自尊感情のうち Check & Buss の自尊感情は、中学生のデータに基づく二次因子分析では第1因子と第2因子ともに同程度の高い因子負荷量を示したのに対して、高校生と大学生のデータに基づく二次因子分析では第1因子にのみ高い負荷量を示した。

考 察

本研究の主な目的は、二次因子分析をとおして3つの自己愛傾向（誇大性、身体賞賛、自己確信）と3つの自尊感情が1つの因子を構成し、評価過敏性が別の因子を構成するかどうかを確認することであった。二次因子分析の結果、すべての学校段階で3つの自己愛傾向（誇大性、身体賞賛、自己確信）と Rosenberg の自尊感情が第1因子を構成し、評価過敏性が第2因子に高い負荷量を示すことが明らかになった。この結果は、予想の一部を支持するものである。しかし、一貫して自尊感情の SE-I が評価過敏性と同じ第2因子に高い負荷量を示した。SE-I（表6）は、「19. 他の方が自分と一緒にいることを好んでいるかどうか気にする（逆転項目）」や「22. 友達や知り合いの中に自分のことをよく思っていない人がいるかもしれないと考えるとき、そのことを気にする（逆転項目）」等の他者からの評価を気にする内容の項目から構成されていた。評価過敏性（表1）の項目も他者からの評価を気にする内容のものであったことから、この2つはほぼ同じ側面を捉えるものであったと解釈できる。そのため、すべての学校段階で同じ因子に高い負荷量を示したのであろう。

また、Check & Buss の自尊感情の負荷量が中学生と高校・大学生で異なっていた。本研究ではこの原因を特定することはできないが、学校段階の違いから次のような解釈が可能であると思われる。Check & Buss の自尊感情尺度項目（表5）をみると、「10. 私の人生は失敗である（逆転項目）」や「2. 私は駄目な人間だと思う（逆転項目）」等の全般的な自己評価に関する内容の項目から構成されていた。進路選択や職業選択に直面している高校生や大学生は、多様な自己の側面に対する評価を総合して自己評価をすることが可能であると考えられる。それに対して、中学生は自分自身について自己評価する機会が少なく、養育者や教師等の他者からの評価が自己評価に影響しやすいと考えられる。自己の評価基準によって全般的な自己評価をしにくい中学生では、全般的な自己評価に関わる Check & Buss の自尊感情が他者からの評価を気にする側面である評価過敏性や SE-I と同じ因子に高い負荷量を示したのであろう。

表8からわかるように、自己愛傾向の評価過敏性は、高校生と大学生が中学生よりも有意に高かった。中山・中谷（2006）は、評価過敏性と誇大性について中学2年生、中学3年生、高校1年生、高校2年生、高校3年生、大学生の間で比較検討している。その結果、評価過敏性は高校2年生と大学生が中学2年生よりも有意に高く、誇大性は大学生、高校3年生、高校2年生が中学2年生、中学3年生よりも有意に高かった。本研究の評価過敏性における学校段階間の差は中山・中谷（2006）

と一致するものである。しかし、誇大性については、本研究と中山・中谷（2006）の結果は一致しなかった。学校段階別に誇大性の平均得点をみると、中学生の平均得点（2.32）と大学生の平均得点（2.37）がほぼ同じで、両者が高校生（2.50）よりも低い値であることがわかる。中学生の得点が高校生の得点よりも低いことは中山・中谷（2006）の結果と同様であるが、大学生の得点が高校生の得点よりも低いことは中山・中谷（2006）の結果と異なるものであった。中山・中谷（2006）によると、誇大性とは、他者の評価によらず、自らを肯定的に認識することで、自己価値・自己評価を肯定的に維持する働きをもつ自己愛傾向である。本研究において大学生の誇大性得点が低かった理由として、看護学を専攻する学生であったことがあげられる。彼らは、患者や高齢者等に対して医療や福祉サービスを行う職業に就くことを目指し、そのための訓練を受けている。このような集団では、対人関係やコミュニケーションを重視する傾向にあるので、他者からの評価を気にせずに自己を高く評価する誇大性の自己愛傾向が低下したものと解釈される。

最後に、本研究の限界点・問題点として以下の3点が指摘できる。第1に、自己愛傾向と自尊心についてのみ測定し、他の側面を測定していないことである。本研究では、青年の自己愛傾向が青年期後期（大学生）の自己構造の構築と正の関連があると仮定した。この関連については、三船・氏原（1991）等が臨床経験に基づいて指摘している。しかし、論文検索ソフト（CiNii）を使って文献検索をしたところ、わが国では自己愛傾向と自己構造の構築あるいはアイデンティティ形成との関連を実証した研究はほとんど報告されていないことがわかった。今後の研究では、青年期の自己愛傾向と自己構造の構築またはアイデンティティ形成との関連について発達的に検討する必要がある。第2に、本研究の対象者には人数や男女比に偏りがあったことである。つまり、高校生と大学生の対象者の人数が中学生に比べて少なかった。そのため、各学校段階の学年間の違いを含めた発達的な違いを詳細に検討することができなかった。また、大学生の対象者の多くが女性であったので、自己愛傾向と自尊心の発達差や二次因子分析を男女別に検討することができなかった。自己愛傾向を調べた研究間に一貫した性差はみられないが（小塩, 2004）、いくつかの研究（例えば、三船・氏原, 1991）は男性の自己愛傾向が女性のそれよりも高いことを報告している。もし自己愛傾向に性差があるならば、自己愛傾向と自尊心との関連性にも男女間で違いがみられる可能性がある。今後は自己愛傾向と自尊心の各下位尺度について各学校段階の男女別に二次因子分析を行い、本研究と同じ因子構造が得られるか否かを確認する必要がある。最後に、本研究では青年期の自己愛傾向の発達を横断的に検討した。しかし、青年期における自己愛傾向の果たす役割を詳細に解明するためには、同一対象者を時間経過にそって追跡する縦断的な発達研究が求められる。

引用文献

- 相澤直樹 (2002). 自己愛的人格における誇大特性と過敏特性 教育心理学研究, **50**, 215-224.
- 安藤清志 (1987). さまざまな測定尺度 末永俊郎 (編) 社会心理学研究入門 東京大学出版会 pp. 211-228.
- Cheek, J. M., & Buss, A. H. (1981). Shyness and sociability. *Journal of Personality and Social Psychology*, **41**, 330-339. (バス, A. H. 大淵憲一監訳 1991 対人関係とパーソナリティ 北大路書房)

- 遠藤辰雄・安藤延男・冷川昭子・井上祥治 (1974). Self-Esteem の研究 九州大学教育学部門紀要, **18**, 53-65.
- 遠藤由美 (1999). 自尊感情 中島義明 (編) 心理学辞典 有斐閣 pp. 343-344.
- 小西瑞穂・大川匡子・橋本 宰 (2006). 自己愛人格傾向尺度 (NPI-35) の作成の試み パーソナリティ研究, **14**, 214-226.
- 松岡弥玲 (2006). 理想自己の生涯発達:変化の意味と調整過程を捉える 教育心理学研究, **54**, 45-54.
- 三船直子・氏原 寛 (1991). 青年期の自己愛人格について:実証的研究を中心にして 大阪市立大学生活科学部紀要, **39**, 199-213.
- 中山留美子・中谷素之 (2006). 青年期における自己愛の構造と発達の变化の検討 教育心理学研究, **54**, 188-198.
- 大石史博・福田美由紀・篠置昭男 (1987). 自己愛的人格の基礎的研究 (I):自己愛的人格目録の信頼性と妥当性について 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 534-535.
- 小塩真司 (1997). 自己愛傾向に関する基礎的研究:自尊感情, 社会的望ましさとの関連 名古屋大学教育学部紀要 (心理学), **44**, 155-163.
- 小塩真司 (1998). 自己愛傾向に関する一研究:性役割との関連 名古屋大学教育学部紀要 (心理学), **45**, 45-53.
- 小塩真司 (2001). 自己愛傾向が自己像の不安定性, 自尊感情のレベルおよび変動性に及ぼす影響 性格心理学研究, **10**, 35-44.
- 小塩真司 (2004). 自己愛の青年心理学 ナカニシヤ出版
- Raskin, R., & Hall, C. S. (1979). A narcissistic personality inventory. *Psychological Reports*, **45**, 590.
- Raskin, R., & Terry, H. (1988). A principal-components analysis of the narcissistic personality and further evidence of its construct validity. *Journal of Personality and Social Psychology*, **54**, 890-902.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton: Princeton University Press.
- 相良麻里 (2006). 青年期における自己愛傾向の年齢差 パーソナリティ研究, **15**, 61-63.

付 記

本研究は、第2著者の卒業論文を再分析し、加筆・修正をしたものです。本研究の調査に回答していただいた中学生、高校生、大学生の皆様にご感謝申し上げます。また、本研究の調査実施にご協力賜りました各学校の教職員の皆様にご深く感謝申し上げます。